外家來ヲモ切殺シ、源八方ニモ手負十人計御座候、以上三ツノ首ヲ取持セ、牛込近處ニ源八知人ノ侍有之候、其方マデ引取申由ニ御座候、隼人首取申候ハ、辰ノ刻三時バカリノ間ユヘ、見物モ多ク候テ、花ヤカナル敵討ト申事ニ御座候、源八當年十七ト申候ヘドモ、イマダ角額ニテ候ト申候、源八事只今數馬ト申由ニ御座候、如何ノ義候ヤ、今ニ死骸ヲモ今日四日ノ九時マデ引不申由、御屋敷ヨリ見物ニ參候衆被申候、宇都宮ニテノ樣子ハ、内藤勘兵衛物語ト承リ申候、昨三日ノ義ハ、牛込近所ノモノ物ガタリ承リ合、掛御目候、以上、

二月四日　吉田逸角

〔日本武士鑑三〕奥平源八同苗隼人親兄弟討事

掃部頭殿登城有て、御老中に源八口上書を見せさせ給ひ、〇略中やがて達上聞給ひ候へば、忝も上意に思召旨はありながら、達て奉願候間、掃部頭に被下と思召、流罪に被仰付との義に付、掃部頭殿いはく、其某拜地彦根に屈竟の所候、爰につかはし申度候と有し時、板倉内膳正殿いはく、遠國迄は道中の氣遣もなきにあらず、先今度は伊豆の大島に遷をき、重ねて御訴訟然べし、御取次は何時も仕候はん、此義宜かるべしと一決し、掃部頭殿歸り給ふ、〇略中其比の狂歌に、

かたり出す淨瑠璃坂の敵打扱も其後ながされにけり

〔常山紀談二十五〕讃州丸龜、京極備中守高豐の弓足輕、尼崎幸右衛門といふ者あり、〇略中幸右衛門妻は、妹の夫なる關根元右衛門といふ者のかたに、月日をおくれり、只朝夕に夫の最後の有樣口をしく思ひつゝ、歎きのあまりに病づき、翌年二月に死しけり、三歳になりける女は、をばの養育にて十三歳になりて、名をりやといふ、元右衛門夫婦を實の父母なりと思ひ居けるに、或時こまやかに父母の事ども語り聞せ、汝が母は我爲に姉なるが、せめて此子が男なりせば、仇を討つ事も有べきに、口をしやと明くれなげきて、空しくなりぬと語りけるに、りや大に驚き、今まで夢に